

高齢者の暮らしを支える活動

マサミ・コバヤシ・ウィーズナー

Assistant Director IMPACT*1

前号では、義母フランの例でアメリカ人の「NPO魂」を紹介した。今回はアメリカの高齢者の暮らしをいろいろなステージで支える「さまざまな活動」を紹介したい。

介護専門職、在宅ホスピス事業、介護する家族、そして一人の思いやりから始まった行政の目覚ましい成果。それぞれの活動や思いに、アメリカの高齢者像が浮かぶ。

■ ヴィッキーの仕事

ビクトリア(愛称・ヴィッキー、50代)は、フィリピン生まれ。兄弟18人に別々の乳母がつくような裕福な家庭で育ったが、政変でアメリカに来たという。現在はサンフランシスコ市の高級住宅地パシフィックハイツにあるケア付き有料老人ホーム「コベントリーパーク」で、フルタイムの介護職についている。ヴィッキーがフルタイムを選んだのは、自身の医療保険などの福利厚生が欲しいことが一番の理由だった。

このホームの平均の部屋代(食費は除く)は、年額で6万ドルから10万ドル。介護にかかる費用は別で、24時間3交代で介護がつくような場合は年間で20万ドルが別途必要となり、それが可能な裕福なシニアが暮らしている。ちなみに先日入居した高齢者は、日本円で250億程度の資産家であった。

アメリカでは介護にかかる費用は、一定程度の資産があれば全額自己負担なので、介護が必要になることは財政的な出費を意味する。公的な介護制度を使えるのは低収入や障害を持つ場合だけなので、一般的には民間の介護保険を購入するか資産を食いつぶしていくことになる。

コベントリーパークにおける介護の、医療的な部分は看護職が担当しているので、ヴィッキーの業務は日本の分類でいえば「身体介護」に加えて「見守り」や「つき添い」などが中心である。ヴィッキーの週40時間の仕事も、病院や美容院へつき添いや着替えや身づくろいの手伝い、愚痴の聞き役など家族代わりの役目が多い。家族以外は

ライセンスを持った正式なアテンダントでないと、車いすを使った移動の介助はできないため、車いすを押す仕事が多くなるが、体重も重く上背のあるアメリカ人の介助は、なかなか大変な仕事である。

日本では介護職の待遇改善が大きな課題となっているが、アメリカにおける高齢者介護の時間給は事務職やカスタマーサービスなどと同レベルで、州によって差はあるが最低賃金の約2倍程度が相場とされ、現在のサンフランシスコ州では約18ドルである。営利事業の施設では採用条件も厳しいが働きやすく、ヴィッキーのケースのように最低の福利厚生をつけることが義務づけられている。

一方、非営利事業でNPOやNiPO*2であれば、福利厚生がつかずしかも1回当たりの時間が短い傾向がある。時間給は営利と同じだが4時間をミニマムとしているため、3時間59分までの時間はすべて同額の約72ドルのチャージになる。夜間は1.5倍、休祭日は2倍であるが、いずれにしても需要があるときだけの仕事なので、その収入だけに頼っては生活が成り立たない。

幸いにもフルタイムの職を持つヴィッキーは、週末や週日の夕方、休日や祭日には地元のNPOからの依頼で、パシフィックハイツに隣接する庶民が多く暮らす地域でも介護を担当している。

■ コニーの仕事

一般に西海岸では在宅ホスピスが中心である。特にサンフランシスコでは1980年代後半から毎年2,000人ものエイズ患者が亡くなったため、がんの高齢者向けに提供していたホスピスサービスを、エイズ禍に対応してサービスを拡充した。エイズ患者用のホスピスは既存のシニア向けサービスを利用してつくられ、コニー・ボーデン(50代)は最近までホスピス・バイ・ザ・ベイ社(訪問看護組織NPO)の事務局長を長く務めてきた。

エイズは多くの死や喪を連れてきたが、同時にそれま



マサミ・コバヤシ・ウィーズナー

Masami Kobayashi Wiesner

カリフォルニア州立大学バークレー校(心理学専攻)卒業、スタンフォード大学大学院(社会心理学専攻)中退。現在はサンフランシスコで通訳者として活躍するほか、「のびる会：新渡米者の会」顧問(元会長)、NPOワークショップシリーズ講師などを務める。近著に「シニアが活かすアメリカのNPO」(現代書館)がある。

では中流の主婦層や高齢者中心だったボランティア活動が一般化し、多くの若者が参加する機動力にもなった。ホスピス・バイ・ザ・ベイも90年代半ばまでは質・量ともにボランティアの余裕があり、定期的に若いボランティアにトレーニングやスクリーニングをして、訪問看護で彼らにいくつかの役割分担をさせるほどだった。それが96年になるとエイズに奇跡の治療薬がもたらされ、一気に死者が少なくなり、エイズホスピスの需要も消えたが、同時にボランティアも消えた。

しかし、がんなどで終末期を迎える人の数や、高齢者中心の在宅看護需要には依然として変化がなかった。そこで介護部分を担うボランティアが不足し、州のサービスだけでは足りずに、自費で雇う人が増えた。

サンフランシスコでは、シニアたちの住むところならアパート、集合住宅、ナーシングホーム、ホスピスと、どの種類のハウジングでも訪問看護と訪問介護が出張サービスを行う。

コニーは、遠く離れた地で父親が倒れたときに、遠距離介護で苦勞した経験を持っている。介護にあたる人を雇っても、きちんと指導しモニターをしなければ良いケアはできない、ということをも身をもって知った。

そこでコニーは「アシステッド・バイ・ザ・ベイ」という事業法人をNPOとして作り、それまでの非営利ボランティア対象のノウハウを使い、介護者の訓練をした。NPO運営のノウハウだけではなく、法律が許す範囲でオフィスの共有など費用の節約もした。これでクライアントには安価で質の良いサービスを提供することができるようになったのである。

■ ピオニーの夢の仕事

今から約40年前、ピオニーが11歳のときに家族は台湾からアメリカへ移住した。一家5人はサンフランシスコで暮らし、ピオニーはソーシャルワークを勉強しその後結婚

【*1】

IMPACT: International Medical Program for AIDS Clinical Training
IMPACTは、UCSF(カリフォルニア州立大学サンフランシスコ校)のメディカルセンターが実施しているプログラム。

【*2】

NiPO: Not for Profit Organization
税法上は営利法人として設立するが、非営利目的で登録し会計・経理や納税方法も非営利法人経営に準ずる組織。

した。やがてピオニーの2人の子どもたちも成長し、早期退職した夫と穏やかに暮らし始めたが、その頃ニューメキシコ州に引退していた両親の健康状態が思わしくなくなった。両親は3人の子どもたちが住むベイエリアに戻る決心をした。

専業主婦だったピオニーは、何度も両親を訪ねた。両親の家を売り、引っ越しの手続き一切をした。1,000キロにもなろう道のを運転して、荷物を運んだ。ニューメキシコの家を売った額では、物価の高いサンフランシスコでとても家は買えなかった。月額800ドルの賃貸アパートを紹介したが、両親は黙って首を横に振った。

ピオニーは夫とともに引っ越し、自分たちの家を両親に提供した後も、毎日ケアギバーとして通い家事をこなしてきた。ある日、市の郊外に住む独り暮らしの姉が、両親を引き取るようになった。姉の住む郡では、月々500ドルの現金が姉に介護手当として支給されるが、姉は早朝から夕方まで家には戻らないので、ピオニーが毎日姉の家までランチを届け身の回りの世話を続けた。もちろん両親からも姉からも、お金はもらわなかった。

家族は「専業主婦なので時間がある、子どもなんだから親の面倒をみるのは当然」という儒教文化を背負った一家だった。兄も姉もピオニーにはろくな感謝の言葉もなく、経済的な協力もなかった。利用されてきたという思いだけがピオニーに残り、両親が亡くなって13年経ったが、あれから1度も兄や姉とは話していない。

サンフランシスコでは「老人ホームへ〈捨てる〉のは親不孝」と決めつける中国人シニアたちも少なくなかった。そこで独り暮らしや働く家族との同居を可能にするために、コミュニティ既存のサービスを利用するオンロックNPOシステムがつくられた。その効果は全米に響いて連邦政府のPACE(Program All-inclusive Care for the Elderly)設立につながった。

ピオニーは、自身のつらい経験からオンロックだけではまだ充分ではないとし、アジア・太平洋系移民の子ど



コベントリーパーク前に立つ
ヴィッキー

も同士が結束し支え合うシステムの必要性を訴えている。特にサンフランシスコ地域ではアジアの文化や習慣を抱えたままの二世が多いので、彼らに対する教育・啓発活動と、介護の担い手である二世への支援と情報提供や教育が欠かせない。そうしなければ、子どもの一生はアジアの文化や習慣のしがらみでだめにされてしまう、とピオニーは考えている。

テキサス州ヒューストンには、アジア・太平洋諸島系高齢者への情報提供や教育を担うNPOがある。事務局長グレース・チェンは香港からの移民二世である。ほかの兄弟たちはより大きな仕事や教育のチャンスを探求めて、カリフォルニアやニューヨークへ出てしまった。残されたグレースは、他人の世話にはならないといひ張る実の親と夫の親の介護に、夫と二人、孤軍奮闘で長い年月を費やした。

PACEをつくるほどの力はないが、ヒューストンのグレースは自分たちのような孤立した夫婦をサポートするために、とりあえず高齢者の教育を始めた。当時働いていた中国系市民会館のトップに訴え、同士を集めこの市民会館にNPOの新しい部署を立ち上げた。

サンフランシスコのピオニーは「アメリカに住むアジア系の家族を助けられるのは、私たちみたいにアジアの価値感に実際に苦勞させられた人たちだけなの。日本、韓国、中国、フィリピン、ベトナム、タイ……みんなが助け合ってなんとかしていきたい、これが私の夢」と笑顔で語った。

■ ホワイト氏の仕事

アフリカ系アメリカ人であるホワイト氏は、サンフランシスコの対岸オークランド市で育った。アメリカ南部ルイジアナ州の大学へ行き、黒人で初めてのフットボール選手になった。ルイジアナでの学生時代、周囲の偏見や差別から彼を守ってくれたコーチの奥さんが州知事になったのが2003年。当時マーケティング会社に勤務して

いたホワイト氏は州知事室に招かれ、政治任命でシニア総務室ディレクターに就任した。

2年後ハリケーンカテリーナが襲撃、ルイジアナ州のナーシングホームのぜい弱な入居者たちはシェルター環境では暮らせないため、よその州のホームへ移転してもらった。ルイジアナ州どころか、自分の町も出たことのないようなシニアたちが、ワシントンDCやバージニア、ジョージアやノースカロライナと、それぞれのツテを頼りに南部の諸州に散っていった。

ホワイト氏はしばらくすると、送り込んだ他州のナーシングホームから次々に訃報を受け取るようになった。孤立したシニアたちの死が報告され、ついにその知らせは数百人に達した。

ホワイト氏は意を決して、連邦の高齢者担当局 (Administration on Aging=AoA) に助成金を申請し、シニアとその家族のデータベースづくりに取りかかった。多くのボランティアの協力も得て実際にデータベースができ上がると、それは各地に散らばったシニアが家族と連絡を取り合うことに、最大の威力を発揮した。

アメリカでは三世代同居こそ少ないが、日常生活の中での家族の結び付きが大切に考えられており、6割以上のシニアが毎日家族と電話の会話なりで連絡を取り合う。特に南部ルイジアナはその独自性と家族の結束が強い土地柄で、天然の災害とはいえ無残にその結束を切られたシニアたちが、長く生きられないのも無理ないことだった。

データベースができたことで、ルイジアナへ戻る希望が叶ったシニアも何人もいる。諸州に散った家族との連絡がつき、家族の移転先に近いナーシングホームへ移っていったシニアも、数知れない。

ホワイト氏は、この仕事ほどやりがいを感じたプロジェクトはなかったと語るが、プロジェクト成功の何よりの証拠は、ホワイト氏のオフィスにはもう訃報が届かないことだった。